

学ぶ

高校の新指導要領 非認知能力

学んだ力 どう使う

2022年4月に全面実施される高校の学習指導要領は、学校教育で育む生徒の資質・能力として、知識・技能とともに、思考力や学ぶ意欲、人間性など従来のテストでは測りづらい「非認知能力」の育成を掲げる。社会の変化が大きな今、学んだことを自分の人生に生かす力も重要とする考えだ。ただ、その能力をどう測り、評価するのか。教員からは戸惑いの声が聞こえてくる。(白井春菜)



タブレット端末でAI-GROWを受験する生徒ら
愛知県岡崎市の岡崎北高で

「頑張つて一を十に上げた生徒と、あまり努力しなくても五から十にした生徒の評価をどう数値化するのか」。名古屋市の私立高校で国語を教える男性教諭(仮名)は、「学びに向かう力」の評価の難しさに悩む。勤務校は生徒の七割程度が大学の推薦入試を受けるとあって、評価は結果に結びつく。「答えが一つとは限らない国語ならではの話し合いや意見発表を活発にしたいが、客観的な尺度も必要。小テストと中間・期末テストは今後も残る」と話す。

愛知県立高校の教務主任(仮名)は「非認知能力の重要性は理解しているが、ICT(情報通信技術)化など他にもやるべきことがある」と余裕のなさを口にする。ただ、非認知能力は、集団での行動の中で、経験を通して養われるものも多い。既存の授業や行事でも、生徒らが粘り強く取り組み、達成感を味わう体験で補えると考えている。

一方、教育産業界は非認知能力を伸ばすプログラムの開発に熱い視線を送る。教育と技術を掛け合わせた分野「EdTech」の市場規模は拡大しており、経済産業省

評価悩む教員／新ツール注目

が後押しする。私立校でのプログラム活用が目立つ中、愛知県岡崎市の県立岡崎北高校は本年度、民間企業が開発した評価ツール「AI-GROW」を導入した。内向性と外向性、独立性と協調性などを測る気質診断と、創造性や耐性など特定の役割で成果を上げる行動特性「コンピテンシー」の評価が二本柱。コスモサイエンスコースの三年生三十八人が七月に受験した。

気質診断では、タブレット端末の画面上に次々と現れる、「活発な」「冷静な」など気質を表す単語を二つに分類する。回答にかかった時間や指の軌跡なども記録される。コンピテンシーは、自分と級友三十分の話し合いへの参加度、問題解決への姿勢などを判断して回答する。自己評価と他者評価を組み合わせるのが特徴だ。評価が厳しいといった入力傾向の個人差は、人工知能(AI)が補正する。受験後すぐに、気質とコン

ピテンシーが数値で示された。平野善哉さん(仮名)は「自分はずっと諦めてしまっていたけれど、他者評価で耐性が高かったのが意外。自信になる」と喜ぶ。将来、化粧品の商品開発を希望する小畑今日子さん(仮名)は「良いものを作るには他者との意思疎通が必要。コミュニケーション能力を高めたい」。加藤晴史郎さん(仮名)は「グローバル化で意見をきちんと話す力が求められている。思ったよりも協調性が高い」と評価だった」と、結果を受け止めた。

担任の和田亨子教諭は「学力テストで測れない力をどう評価するか模索している。これまでは自己評価の適性検査しかなく、客観的な判断基準があるかと思っていた。学習指導要領の改訂や、新型コロナウイルス禍で校外学習が制限されたことなどから導入を決めた。しかし、生徒一人につき年間一千円余の費用が課題で、実施は一クラスのみにとどまっている。

なぜ今、学力だけでは測れない能力が求められるのか。愛知教育大の高綱睦美准教授(キャリア教育)に聞いた。

知識が不要なのではない。何のために学ぶのかを考えることが必要になってきた。社会の変化が大きく、汎用性がある力が求められている。言われた通りにやればいいという時代ではなくなった。

就職しても思い通りにならないことはたくさんある。幸せの形も多様化している。自分なりに幸せを感じて生きていける土台を育むのが学校教育。どんな人生を送りたいかを生徒自身が

生き方の土台育む 識者指摘

考え、行動を起こし、学んだ内容を関連づけていくのがキャリア教育の基本だ。

新しい教育ツールは使い方が第一。自覚していない特性に気がつき、視野を広げることにつながる。ただ、行動特性は変化し得るので、結果は現状として捉え、重要なものは成長させることだ。

特別なことをしなくても、学級で意見を言う機会を重ねれば表現力が鍛えられる。当番や宿題をこなす中で得意分野が見つかる場合も。人と出会って経験を重ね、その行動が自分の人生や社会にどんな意味をもたらすのかを考えることが大事だ。